

禅寺では、「作務」と呼ばれる修行があります。「坐禅」が静の坐禅に対して、「作務」は動の坐禅ともいわれます。

三〇年前、私は福井県にある大本山永平寺で、修行をさせていただきました。修行僧は、朝食が終わると衣から作務衣に着替え、雑巾をもち、一気に本堂まで階段を一目散に駆け上がります。一番上まで着いたら、段の角を切るように素早く拭きながら下り、下も皆で拭き上げます。毎日行っているのです。床はピカピカです。掃除を行うことも含め、日常すべての行いを丁寧に実践することの大切さを学ばせていただきました。

ところで、私がお預かりしているお寺では、父と二人で、朝、境内の掃き掃除をします。八十年代半ばの父ですが、一つのことを一緒に取り組めるのは大変ありがたいことです。掃除の場所も分担し、境内を父、参道を私が受け持ちます。私が忙しい時には、私の分担する場所も掃除をしてくれますので、感謝してもしきれません。父の掃除は先代の師匠から教わった掃き方で、今でもその通り行っています。父が掃除をした場所を見ると、ほうぎの目が整然と通っていて美しく見えます。

父は中学一年の時に、養子としてお寺に迎えられました。師匠から厳しく教えられ、学生時代も苦勞していたそうです。話を聞きながら、頭に 白タオルを着け、ほうぎを持って掃く姿、掃き清めた跡を見ると、それは、父の僧侶としての生き方を示しているかのようにも感じます。お参りになる方からも「掃除がゆき届いていて、清々しい気持ちになれます」という お声を聞くと、私も嬉しくなります。

十数年くらい前のことです。私は、いつものように掃き掃除を行っていました。参道には、マキの木が二本あります。葉自体が細長いので、雨や強風であちこちに飛ばされ、掃除も一苦勞です。ホウキの間から、細い葉が抜けてしまうので、マキの木の周辺の掃除は、思うようにはかどりません。それを見ていた父が「もっと力を抜きなさい」といいました。私は、一瞬、父が何を言っているのかわかりませんでした。自分の掃いた跡を よく見ると、葉をかき集めるのに必死になりすぎて、肝心な葉は集まらず、掃いた跡だけが深く掘れていることに気づきました。それ以降、掃除をするときにはいつも父の言葉を意識しています。

大本山永平寺をお開きになった道元禅師さまが示された「行持道環」ということばがあります。「行いを持続する」と書いて「行持」、「道」に環境の「環」と書いて「道環」。「行持道環」とは、仏の教えに従い修行し続ける、つまり一生修行であることを意味します。私はまだ父の域には及びませんが、せめて参拝者の方に気持ちよくお参りをしていただけるよう、「行持道環」しながら精進してまいります。